

最優秀賞

「一瞬の出会い 一生の思い」

福岡県 廣木^{ひろき} 沙耶香^{さやか}さん 30歳

私の生まれ故郷は徳島県。嫁いだ先は福岡県。車ではフェリーを乗り継ぎ8時間。新幹線では4時間の小旅行を経て、帰省をします。

3歳の娘と1歳の息子、そして私の3人の仲間で長い旅路に向います。長旅を退屈させないためのおもちゃ、空腹時のおやつ、もしものときの着替えなどなど…後ろにはリュック、前には抱っこされた息子、右手には娘、左手にはカバンという大荷物での移動です。電車の席に座るのも一苦労、バスを降りるのも一苦労。

まだまだ小さいわが子たちと旅することは簡単なことではありません。しかし、苦労してまで私が長旅を選ぶには理由があります。それは、「人の温かさを感じられる」という何よりも代えがたい瞬間があるからです。旅先では毎回、必ず、見知らぬ方が声をかけてくれます。

おばあちゃんが「お母さん、大丈夫？」
スーツを着たおじさんが「荷物ひとつ持ちましょうか？」

小学生のお兄さんが「席、譲るので座ってください」
若いお姉さんが「一緒に出口まで連れていきますよ」
本当に温かい、うれしい言葉です。毎回、毎回幸せな気持ちにさせて頂き、助けて頂いております。

子連れでの移動は、色々な方に不快な思いをさせたりご迷惑をおかけしてしまっていることもあると思います。それは本当に申し訳なく思います。

しかし、色々な方にお声かけいただくことで子育てを通して人の温かさに触れることができ、子育てを一生懸命頑張ろう、という気持ちにさせていただいています。そして今、4歳になった娘が困っている方を見つけると「大丈夫ですか」と声をかけるようになりました。一瞬の出会いであるかもしれませんが、出会った皆さんが娘の心を育てて下さったと思っています。本当にありがたいことです。そして私たちもたくさんの方を幸せな気持ちにさせられるような家族を目指したいと思います。

審査員のコメント

●恒例の実家への長旅。しかも小さなお子さん二人を連れた旅。その道中、出会った人たちから暖かい手助けをもらっている。日本の世間は捨てたものでない。みんなで困った人を助ける。それが、四歳の子供まで引き継がれていく。心温まる文です。(明石先生) ●「助けて」といえる人になること、「ありがとう」と好意を受け取ることは、この世の中、意外に難しいものです。子育て中に「受援力」が高いと、子供たちもたくさんの出会いと経験を得られ、周りも幸せになれます。(松田先生)

優秀賞

「頑張りすぎる妻へ」

大阪府 相野^{あいの} 正^{ただし}さん 66歳

結婚して三十四年になりますね。

授かった子供たちを保育所や学童に預けて働きましたが、兄妹ともに子供会のソフトボールに参加するようになって友達も増え、地域の人にも可愛がられ、明るく元気に育ちましたね。早くに両親を失っていた僕は、初めて大切な家族を持ちました。君には苦労ばかりかけてしまいました。

なのに、一昨年退職したばかりの君が進行がんの宣告を受けたときは、大変なショックで、このままでは君を幸せにすると約束したことが果たせないと思いました。

僕は前がん病変を持っていますが、まさか君まで

とは。しかも君は自分のことより僕や子供たちの心配ばかり。

でも、頑張って手術や抗がん剤治療に耐えてくれました。

お兄ちゃんの結婚式では本当に嬉しそうでしたね。

それでまた今回の再手術も乗り越えました。

君の頑張りや家族のお手本です。だけど、何でも一人で頑張ろうとしすぎます。子供たちも僕もいろんな人に見守られてきました。君も僕たちにもっと甘えて過ごしてほしいと思います。

そして僕に、君を幸せにする余裕を少しだけ下さい。

審査員のコメント

●果敢にがんに立ち向かう妻への賛辞。しかし一人で闘わず、自分たち家族にもっと甘えてほしい。評者は、「僕に、君を幸せにする余裕を少しだけ下さい」という締めくくり思わず落涙した。奥さんががんを克服・回復・快復されますようにと祈らずにはいられない。(内田先生) ●夫婦二人で病と闘いながら、生きていこうとする姿に心が打たれます。がんの治療は耐えがたいもの、といわれます。それに耐えている奥さんを見守っている旦那さん、すばらしいです。家族みんなで、病氣と闘っている人を励ます家族の絆がうまく描かれています。(明石先生)

優秀賞

「グータッチ」

大阪府 ^{すずき たかや} 鈴木 貴也さん 19歳

父が出勤するとき必ず自分たちはグータッチをします。気づいた時には当たり前のようなものになっていました。小さかったころはゴツゴツして大きな父の拳と小さな手を比べて、いつかはこのくらい大きくなれるかなと思っていました。

高校生くらいになると、いつものグータッチの時に少し強めにコツンッと当ててみると、父が「痛っ」と呟き少し微笑みました。少し父を越えられた気がしました。

私にとって父という存在はとても大きいです。

自分は一人っ子なので仕事で疲れているのによく遊んでくれたり、母と私を色々なところに連れていってくれたりしました。本当に感謝しています。そして先日の盆休みには久しぶりに再会して最初はとても照れ臭かったけれど、とても楽しかったです。別れはもちろんグータッチ。

私も将来、父親になると思います。そんな時は父のような優しくしっかりとしたカッコいい父親になります。

必ず、恩は返します。

審査員のコメント

●友人のような父親と息子の関係であるが、同時に、息子が父親を深く尊敬し、憧れている様がよくよく感じ取れる作品である。「グータッチ」を軸とした文章展開も巧みである。(坂元先生) ●お父様も、たくさんの言葉にできない想いを、グータッチで伝えてこられたのかな、と想像しました。きっと心強く、頼もしく思っていることでしょう。ぜひ、将来お子さんとのグータッチでお父様からのバトンを手渡して！(松田先生)

優秀賞

「親子三世代、家族への感謝」

神奈川県 ^{つかもと たかひろ} 塚本 貴広さん 32歳

昨年、子供が生まれ、私は親になった。慣れないことばかりで大変さもあるが、息子の笑顔を見るとたまらなく幸せだ。

今年の夏、私の田舎に初めて息子を連れて帰った。祖父母は喜び、息子も大はしゃぎで楽しそう。私と同じように祖父母も孫の全てが愛おしいようだ。

祖父母が孫を可愛がる姿を見て、ふと気づいたことがある。

物心つく頃には、怒られたり、思い通りにいかない記憶もあるが、0歳児のように全てが受け入れられ、愛情で満ち溢れている、こんな風景があると

は、自分に子供ができるまで思ってもなかった。

私も同じように可愛がってもらったと、親の立場になってわかる、両親への感謝。

この温かい気持ちに気づかせてくれた、息子への感謝。

息子を生んでくれた、妻への感謝。

私に0歳の記憶があれば、もっと親の言うことを聞いて、もっといい子に育ったかもしれない。

ぜひ、この風景を息子が大きくなったら見せてやろう。

きっといい子に育つに違いない。

審査員のコメント

●赤ちゃんのとき、いっぱい抱かれて育った子はいい子に育ちます。お父さん！あなたもきっとすべてを受け入れられ、いっぱい抱っこされて育った筈です。だからこそ今、こんな素直な立派ないい子(父親)に育っているではないですか。感動です。(橋本先生) ●人の親になって初めて知る親の恩。両親への感謝の気持ちがわきあがる。同時に息子を生んでくれた妻へも感謝。親子三世代が揃って初めて味わった感謝の念。この風景を息子にも見せてあげたいと、リズムカルな筆致で積み重ねる。クオリティの高さが際立つ作品である。(内田先生)

優秀賞

「父が根を張って」

東京都 早川^{はやかわ}聰子^{さとこ}さん 48歳

父が根を張って、見守ってくれている。
父が他界して、3年。肺炎で入院した父は、パーキンソン病で、飲み込みが悪くなった。4つの選択肢を示され、余命1年以内、と宣告された。
点滴による栄養摂取を希望した。でも、認知症で、鼻チューブを引き抜いた父を、主治医は。生きることを拒否、とみなした。父の余命は、1、2ヶ月に短縮された。
納得できなかった。でも、点滴にはリスクがある。自然より死を早めたら、一生後悔する。点滴に踏みきれなかった。
残された時間が早送りされた、と考えた。だ

から、会う間隔を短くした。精一杯病院に通った。往復6時間かけて。生きている間に声をかけた。また来るから、だけだが。認知症でも父には、芝桜の写真を見て、きれいだね、と言う心があった。

父が危篤になった日。(また生きて会える。)心の中で父に言った。それが、生きている父を見た最後だった。

父が根を張って、見守ってくれている。父の老人ホームのある、渋沢の花屋で買った花束の葉の茎に。今年も根が生えた。父は生きている。

審査員のコメント

●「(父の)残された時間を早送りされた」という慙愧の念が痛いほど伝わってくる。しかし、花屋で買った花束の葉の茎に今年も根が生えた。このことに筆者は“永遠の命”を感じ「父は生きている」と確信する。評者は韻文のような筆致に惹き込まれ、心を強く揺さぶられた。(内田先生) ●父親の闘病や逝去に対する苦しさや悲しみがひしひしと感じられる作品である。作者の心情には心打たれる。(坂元先生)

優秀賞

「年中行事と共に」

滋賀県 松居^{まつい}とし子^{としこ}さん 55歳

「お祝いやす」の亡き姑の挨拶で、我が家の新しい年が始まります。
大晦日に、祝箸の袋に、家族五人の名前を姑が書きます。お正月三日間は、それでお雑煮やおせち料理を頂きます。それがいつの頃からか、字の上手な次男が書く様になりました。そして昨年の大晦日は、長男の嫁が書いてくれました。自分の名前の書いた祝箸で、お雑煮を頂くという風習を一つ覚えてくれました。
こうして、七草粥、小豆粥で、お正月で疲れた胃を休めます。やがて節分に年の数プラスひとつ分の大豆を食べて、春を迎えお彼岸。男の子二

人の我が家では、端午の節句に、五月人形を飾り、かしわもちをお供えします。七夕には、笹に短冊やお星さまを飾りました。お盆には、家族揃って、お墓参りです。虫の音が聞こえてくると、お月見です。月見だんごは御神酒、里芋を十二個。うるう年には、十三個お供えして、十五夜お月様に手を合わせます。

こうして、我が家は、年中行事と共に、一年が過ぎていきます。姑が亡くなって、三年たった今でも、新しい家族を迎えても、変わらずに伝えていきたいと思います。日々の生活の中の年中行事を。お姑さん見ていて下さいね。

審査員のコメント

●ほとんど見られなくなった文化、風習の伝承が家族での年中行事として子供達に伝えられて行く事も絆の構築としての素晴らしい一面です。私宅も飲んだくれて帰宅しても、深夜に「鬼は外!」と夫婦二人で未だに豆まきをさせられている節分です。(橋本先生) ●家族のメンバーが入れ替わりながらも、変わらず年中行事が行われていく様が流麗な文章で描かれている。家族の暖かさや絆の強さがじわじわと感じられてくる作品である。(坂元先生)